

# FLORA KANAGAWA

May 31, 2000 No. 50

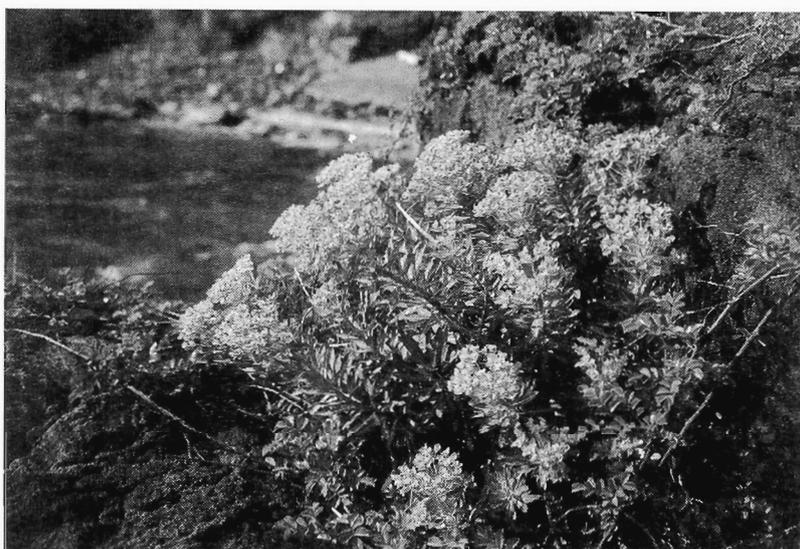
神奈川県植物誌調査会ニュース第50号

〒250-0031 小田原市入生田499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846

e-mail katsu@pat-net.ne.jp

郵便振替 00230-5-10195



イワタイゲキ。1968年に三浦市毘沙門で採集されて以降見あたらなかったの  
で、絶滅したと思われていたが、湯河原町福浦で再発見された(2000年5月8日、  
勝山輝男氏撮影)。

|  |     |
|--|-----|
| 城川四郎:オトギリソウ属の新雑種, カツヤマオトギリ(仮称) .....       | 580 |
| 勝山輝男:神奈川県植物誌備忘録(3) .....                   | 581 |
| 佐々木あや子・勝山輝男・高橋秀男:日本新産の帰化植物, トックリツメクサ ..... | 584 |
| 佐々木あや子:ウマゴヤシ属の絵解き検索 .....                  | 586 |
| 秋山幸也:国内新帰化種の報告 .....                       | 587 |
| 木場英久:新帰化植物, ミツノギソウ .....                   | 588 |
| 高橋秀男:新帰化植物, シロノヂシャ .....                   | 589 |
| 浜口哲一:「湘南植物誌V」を作って .....                    | 591 |
| 事務局:2000年度総会報告 .....                       | 592 |
| 高橋秀男:顧問の初山先生ご逝去 .....                      | 594 |

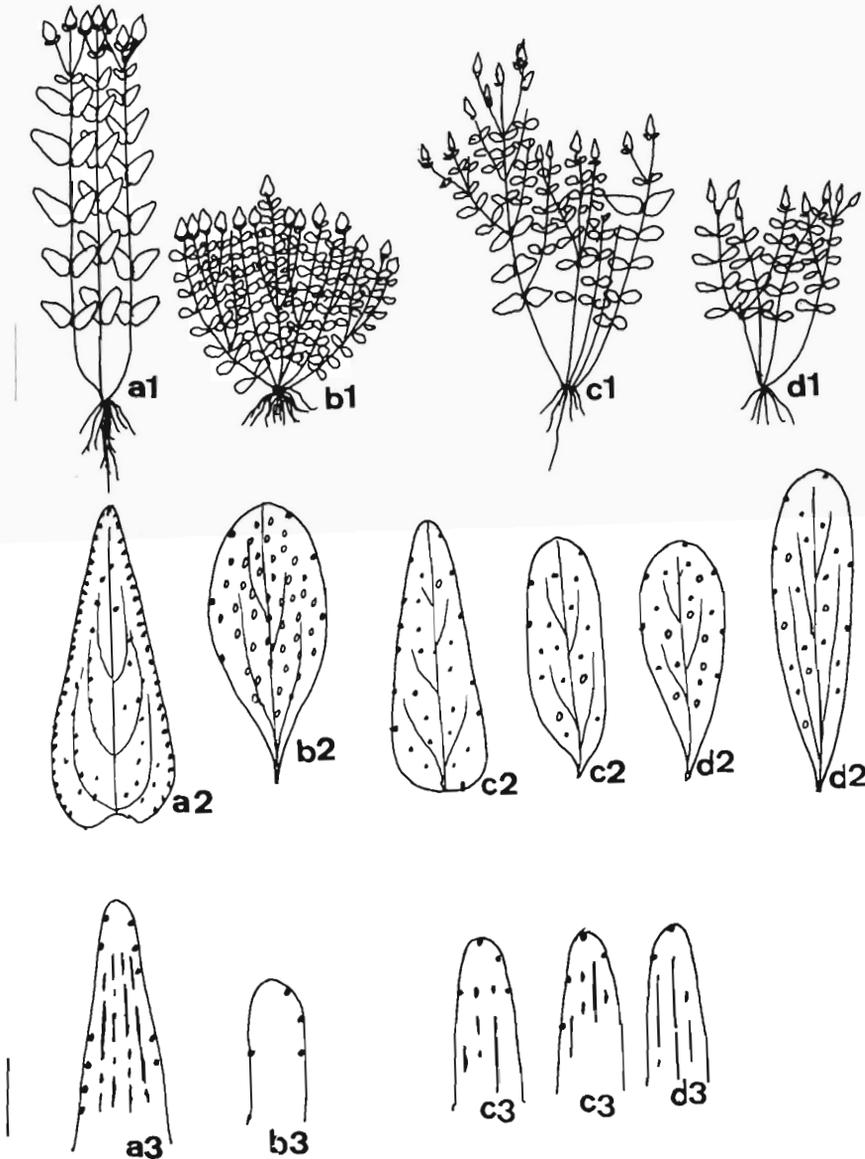
オトギリソウ属の新雑種、カツヤマオトギリ(仮称)

(城川四郎)

1998年夏、須雲川上流の大沢溪谷付近で勝山先生がオトギリソウ *Hypericum erectum* とナガサキオトギリ *H. kiusianum* (ソハヤキ型サワオトギリ)との雑種と推定される植物を発見、採集された。その標本は両者の性質が混合し、果実は萎縮して正常に発育していな

いものであった。その採集地を教えて貰って1999年夏に同地を訪ね、オトギリソウとナガサキオトギリとその推定雑種の生育状況を観察し、標本を採集して詳細に検討した。その結果、この植物が推定されたとおりの雑種であると断定したのでここに報告する。この雑種植物の和名には発見者を記念してその名を冠することにした。

なお、加藤辰巳氏は詳細な研究によって従



a: オトギリソウ, b: ナガサキオトギリ, c・d: カツヤマオトギリ, 1: 植物体の模式図, 2: 葉(腺点), 3: 萼片. スケールは, 1が5cm, 3は1mm. 2は葉形と明点, 黒点をわかりやすくするため適当に拡大, 縮小してあるのでスケールは入れてない.

## 神奈川県植物誌備忘録(3)

(勝山輝男)

来サワオトギリとして1種にまとめられていたものうち、日本海型のサワオトギリとソハヤキ型のサワオトギリとは種のレベルで分け、前者をサワオトギリ *Hypericum pseudopetiolatum* とし、後者をナガサキオトギリ *H. kiusianum* とした。箱根に分布するサワオトギリの名で呼んでいた植物はナガサキオトギリに該当する。ナガサキオトギリは長崎の雲仙岳で採集された標本に基づいて記載されたサワオトギリの変種 *H. pseudopetiolatum* var. *kiusianum* の和名であるが、今後は広くソハヤキ型サワオトギリの和名に用いられ、その北限が箱根ということになる。

カツヤマオトギリは茎の高さ20~40cmで、主茎が直立するオトギリソウ型から叢生するナガサキオトギリ型まで変化があり、同一株でオトギリソウ型の茎とナガサキオトギリ型の茎を併せ持つ個体もある(図c1参照)。葉は長さ5~20mm、葉形も長楕円状皮針形で多少茎を抱くオトギリソウ型から倒卵状長楕円形~倒卵形で有柄状のナガサキオトギリ型まで変化がある。葉の腺点は縁に黒点が並び、内部にも黒点を散在し、多くの場合明点も少数分布する(図c2・d2参照)。がく片は長さ2.5mm、先端は丸みがあり、縁に少数の黒点、内部に黒点と黒条がある。花弁は長さほぼ6mm、普通縁に少数の黒点を着ける。子房は高さ2~2.5mm、花柱の長さ2mm、花後子房は萎縮し果実を形成しない。

カツヤマオトギリがオトギリソウとナガサキオトギリとの雑種であると認めた根拠を下記に示す。

- ①両親種が近距離のに生育していたこと。
- ②茎の直立、傾上、叢生の状況が両親種の間中型を示すこと(図a1~d1参照)。
- ③葉形が両親種の間中型を示し、明点が交じること(図a2~d2参照)。
- ④がく片の形態が両親種の間中型を示し、黒条がオトギリソウより少ないこと(図a3~d3参照)。
- ⑤正常な果実、種子が形成されないこと。

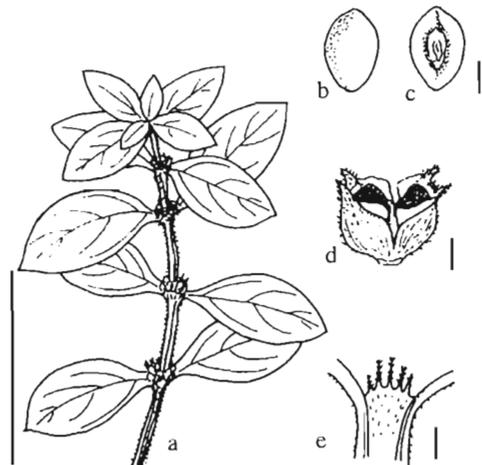
アメリカヤガミスゲをヒレミヤガミスゲに訂正前号(Flora Kanagawa No.49)の神奈川県植物誌備忘録(2)で *Carex brevior* (Dewey) Mackenzie について報告したが、その和名に用いた「アメリカヤガミスゲ」はすでに香川県や兵庫県で採集された北アメリカ原産の *C. scoparia* Schk. ex Willd. につけられていることを、小崎氏および兵庫県の水田氏よりご教示いただいた。そこで、*C. brevior* の和名は果胞に幅広い翼があることから、ヒレミヤガミスゲに変更する。

ハリフタバ属(アカネ科)の帰化植物

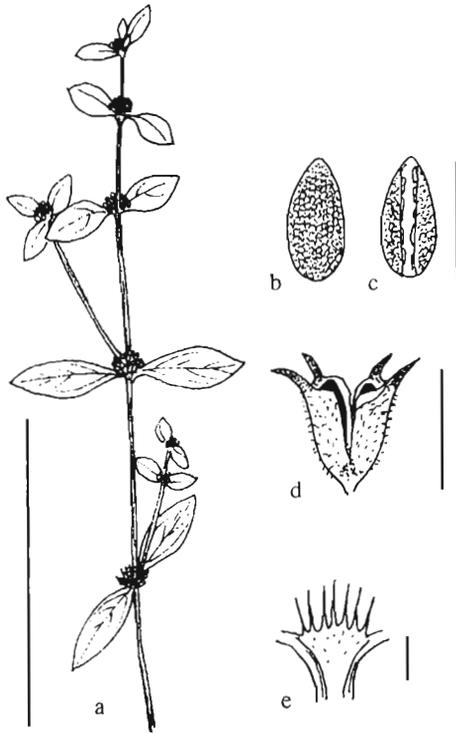
横浜市瀬谷区上瀬谷の畑地で松本雅人氏、秋山幸也氏が、ヒロハフタバムグラ *Spermacoce latifolia* Aubl. とマルバフタバムグラ *S. prostrata* Aubl. の2種のアカネ科ハリフタバ属の帰化植物を採集されたので報告する。

ハリフタバ属(*Spermacoce* L.)の在来種は南西諸島にハリフタバがあるのみで、その他に4種の帰化が記録されている。ヒロハフタバムグラ、マルバフタバムグラ、ナガバハリフタバの3種が南西諸島に記録があり、アメリカハリフタバが千葉で記録されている。

本属には次のような共通した特徴がある。



ヒロハフタバムグラ. a: 茎の上部, b: 種子(背面), c: 種子(腹面), d: 果実, e: 托葉. スケールはaが5cm, b-eが1mm.



マルバフタバムグラ. a: 茎の上部, b: 種子(背面), c: 種子(腹面), d: 果実, e: 托葉. スケールはaが5cm, b-eが1mm.

葉は対生し、その間に櫛の歯状に裂けた托葉がある。花は葉腋につき、多数が集まって花団を作る。花冠は筒部が短く、裂片は4裂。果実は上端に2~4個の萼片が宿存し、熟すと2分果に分かれ、その上部が裂けて種子を出す。

2個の分果の片方だけが裂けるものをアメリカハリフタバ属 *Spermacoce*、2個の分果がとも

#### ハリフタバ属検索表

- A. 茎や葉は有毛. 種子は長さ長さ2.5~3.5mm
  - B. 茎は有翼. 花団は多数の花からなる..... (1) ヒロハフタバムグラ
  - B. 茎は無翼. 花団は少数の花からなる..... ※ハリフタバ
- A. 茎や葉はほとんど無毛. 種子は長さ1~2mm
  - B. 茎は有翼. 葉は楕円形. 種子は長さ約1mmで背面には細かい格子紋がある..... (2) マルバフタバムグラ
  - B. 茎は無翼. 葉は長楕円形または披針形. 種子は長さ1.5~2mm
    - C. 分果は2個とも裂けて種子を出す. 種子の背面には多数の横断する溝がある..... ※ナガバハリフタバ
    - C. 分果は片方だけが裂け、もう一方は裂けない. 種子の背面には格子紋がある..... ※アメリカハリフタバ

に裂けるものをハリフタバ属 *Borreria* G.F.W.Mey. に細分する見解がある。日本に産するものでは、アメリカハリフタバ以外は細分した場合には *Borreria* に属す。日本では Yamazaki (1993, Flora of Japan III a) など *Borreria* に細分していることが多いが、長田 (1972, 北隆館帰化植物図鑑) では *Spermacoce* を採用している。最近のアジアの文献では Ridsdale (1998, Dassanayake et al. ed., A revised handbook of the Flora of Ceylon, 12:332-341.) や Chaw & Peng (1987, Journ. Taiwan Museum 40:71-83) など、属を広く見て *Spermacoce* を採用している。ここでも属を広くとらえ、*Spermacoce* を用いた。

今回採集されたのはヒロハフタバムグラとマルバフタバムグラの2種であるが、日本に在来または帰化する5種のハリフタバ属はいずれもよく似ているので、これらを含めて検索表を作成した。

#### (1) ヒロハフタバムグラ *Spermacoce latifolia* Aubl.

1年草。茎は直立または斜上して高さ60cmに達する。葉は楕円形または広楕円形で長さ2~5cm、幅1~3cm、両面ともに細毛が生える。花団は多数の花からなり、直径1~2cm。萼片は4個で長さ1~2mm、有毛。花冠は白色で長さ4~5mm。種子は楕円形で、長さ2.5~3.5mm、背面は円く、腹面には円い窪みがある。世界の熱帯~亜熱帯に広く分布し、日

本では南西諸島に帰化。今回、本州で初めて採集された。学名には *Borreria alata* (Aubl.) DC. があてられたことがあるが、これは誤同定とされている。標本：横浜市瀬谷区上瀬谷 Nov.16,1999 松本雅人 KPM-NA0117577

(2)マルバフタバムグラ *Spermacoce prostrata* Aubl.

1年草。茎は直立または斜上して高さ50cmに達する。葉は楕円形または長楕円形で長さ1~3cm、幅5~10mm、両面ともに無毛または細毛が疎らに生える。花団は多数の花からなり、直径5~7mm。萼片は4個。花冠は白色で小さい。種子は長楕円形で、長さ約1mm、背面には細かい格子紋があり、腹面には縦に深い溝がある。世界の熱帯~亜熱帯に広く分布し、日本では南西諸島に帰化。今回、本州で初めて採集された。学名は *Borreria ocymoides* (Burm.f.) DC. があてられていることがあるが、これは誤同定と思われる。本種によく似たもので、*S. mauritiana* O.Gideon が台湾やハワイに帰化しているが、これは萼片が2個しかない。標本：横浜市瀬谷区上瀬谷 Nov.16,1999 松本雅人・秋山幸也 KPM-NA0117576

※ハリフタバ *Spermacoce articularis* L.f. — *S. hispida* non L.

※ナガバハリフタバ *Spermacoce asuurgens* Ruiz & Pavon — *S. laevis* non Lam.

※アメリカハリフタバ *Spermacoce glabra* Michx.

アイフウリンホオズキ

*Physalis angulata* L. var. *pendula* (Rydb.) Waterfall

Flora Kanagawa No.48でヒロハフウリンホオズキ *P. angulata* var. *angulata* とホソバフウリンホオズキ *P. angulata* var. *lanceifolia* (Nees) Waterfall について報告したが、ホソバフウリンホオズキに似て、花冠がやや大きいものがあり、これが *P. angulata* var. *pendula* である。千葉県で見つかり、木村・勝山(2000, 千葉県植物誌資料 No.15)がアイフウリンホオズキと名付けて報告した。同じものが神奈川県で

も、愛川町服部牧場(Oct.29,1999 松本雅人・秋山幸也)で採集された。葉が細長いこと、萼が裂片も含めて長さ2~3mmで萼裂片は長さ約1mmしかないこと、葯が長さ1~1.5mmしかないことはホソバフウリンホオズキと同じであるが、花冠は長さ6~8mmあり、ヒロハフウリンホオズキと同じくらいの大きさがある。北アメリカ東南部原産。ホソバフウリンホオズキとは原産地では分布域が異なるが、最近では移入により、両者が混生し、区別が困難な場合があるという。全体はホソバフウリンホオズキに似ているが、花の大きさがヒロハフウリンホオズキに近いので、両者の中間という意味でアイフウリンホオズキと名付けた。県外では千葉県と三重県の標本を見ている。

ナガエセンナリホオズキの学名訂正

ナガエセンナリホオズキが *Physalis pendula* Rydb. ではなく、*P. wrightii* であることを Flora Kanagawa No.48 に書いたが、この学名を *P. acutifolia* (Miers) Sandw. に変更する。ミズリーボタニカルガーデンのホームページから学名のデータベース (<http://mobot.mobot.org/Pick/Search/pick.html>) にアクセスできるが、これで検索すると *P. wrightii* は *P. acutifolia* のシノニムになっている。最近のカリフォルニアのフロラ(Hickman, J.M. ed., The Jepson Manual Higher Plants of California. University of California Press Berkeley)でも同様の扱いになっている。本種は牛糞を撒かれた畑地周辺で増加しているようだ。各地でぽつぽつと採集されている。なお、県内産でもっとも古い標本は横浜市保土ヶ谷区権太坂 Oct.11,1951 出口長男で、出口(1968, 横浜植物誌)が引用している。

キバナホオズキ(新称)

*Physalis philadelphica* Lam.

1年草。全体に毛はなく、葉は卵形で縁には不整の鋸歯がある。花柄は短く花時に長さ5~10mm。花冠は直径約20mm、鮮やかな黄色で内面に顕著な紫斑がある。葯は長さ2~3mmで、花糸は葯よりも細い。メキシコ原産。

最近愛川町で採集された(愛川町服部牧場 Oct. 29, 1999 松本雅人・秋山幸也). 県外では三重県産(四日市市 Nov.12,1995 太田久次 14256)を確認した. オオブドウホオズキ(オオシヨクヨウホオズキ, ホオズキトマト) *P. ixocarpa* Brot. ex Hornem. はメキシコ原産で, 花が小さい点が異なるが, その他に大きな違いがなく, 区別できない可能性もある. 愛川町の標本は花冠が大きいので, *P. philadelphica* とし, 花冠が鮮やかな黄色なので, 上記の和名をつけて整理することにした.

#### ヤクナガイヌムギと開花型のイヌムギ

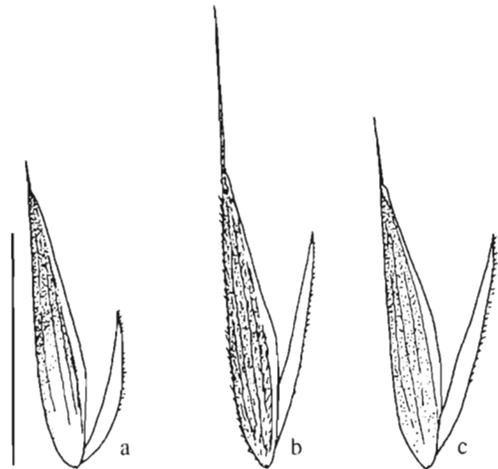
開花していて, 長さ4~5mmの葯が出ていればヤクナガイヌムギ *Bromus carinatus* Hook. et Arn. としてきたが, イヌムギ *Bromus catharicus* Vahl (*B. unioloides* Humb.; *B. willdenowii* Kunth) にも開花する株があり, これとヤクナガイヌムギが混同されているようだ. イヌムギの内穎は外穎の1/2~1/3の長さしかなく, 外穎の先の芒は長さ1~2mm程度である. 閉鎖花ばかりをつける株と開花する株があり, 閉鎖花の葯は長さ0.5mmと小さく, 開花する小花の葯は長さ3~5mmある. 開花する株は, 小花と小花の間が開き, 長い葯が顔を出すので, ヤクナガイヌムギと誤認されやすい. はじめに閉鎖花をつける系統が日本に入り, 最近になって開花する系統が帰化したと推定される.

一方, ヤクナガイヌムギの内穎は外穎の3/4以上の長さがあり, 外穎の先の芒も長い. これまでヤクナガイヌムギとされてきた標本のうち半数は内穎が小さく, イヌムギの開花株であった. また, ヤクナガイヌムギとみなせる標本には次の2系統があった.

① 下方の葉鞘も無毛, 外穎は有毛で芒は長さ7~12mm.

② 下方の葉鞘は有毛, 外穎はざらつく程度で芒は長さ2~5mm.

*B. carinatus* はきわめて多様な種で, *B. carinatus*, *B. marginatus* Nees ex Steud., *B. polyanthus* Scribn. の3種に細分されることも



外穎(左)と内穎(右). a: イヌムギ開花型, b: ヤクナガイヌムギ①タイプ, c: ヤクナガイヌムギ②タイプ. スケールは1cm.

ある. 芒が長く6mm以上あるものが *B. carinatus* で, 残りの2種は芒が7mm以下とやや短い. *B. marginatus* は葉, 葉鞘, 小穂ともに毛が多いタイプで, ピロウドチャヒキの和名が与えられている. *B. polyanthus* は毛の少ないタイプで, 葉, 葉鞘, 小穂とも無毛またはざらつく程度のものとされる. したがって, ①は *B. carinatus* で良い. ②は芒が短いので *B. marginatus* または *B. polyanthus* が考えられるが, 下方の葉鞘が有毛で, 外穎はほとんど無毛で, どちらにもピタリとはあてはまらない. 最近の北アメリカの植物誌では種を大きく見て *B. carinatus* 一つにまとめているものが多いので, ②も含めてヤクナガイヌムギとして扱うのが良いと思う. なお, 勝山(1989, Flora Kanagawa No.27: 238) や田中・勝山(1995, 植物地理・分類研究, 42:173) で報告したミナトイヌムギ *B. pacificus* は誤同定で, ヤクナガイヌムギ *B. carinatus* の典型的なものであった.

#### 日本新産の帰化植物, トックリツメクサ

(佐々木あや子・勝山輝男・高橋秀男)

愛川町半原中河原の河川敷で山口勇一氏がマメ科シャジクソウ属(*Trifolium* L.)の見慣れない植物を採集された. 帰化によるものと

考え海外の文献に当たるとともに東大の博物館に収蔵されている標本と比較した。その結果、アルバニア、ブルガリア、ハンガリー、ユーゴスラビア、ルーマニア、ギリシャ、イタリア、シシリア、コルシカ、クリミア、ロシアに分布する *Trifolium vesiculosum* Savi. var. *vesiculosum* であることが判明した。萼が丸くとっくり形をしているので、和名をトックリツメクサと新称し、日本新産の帰化植物として報告する。

採集された標本をもとにトックリツメクサの特徴を記す。

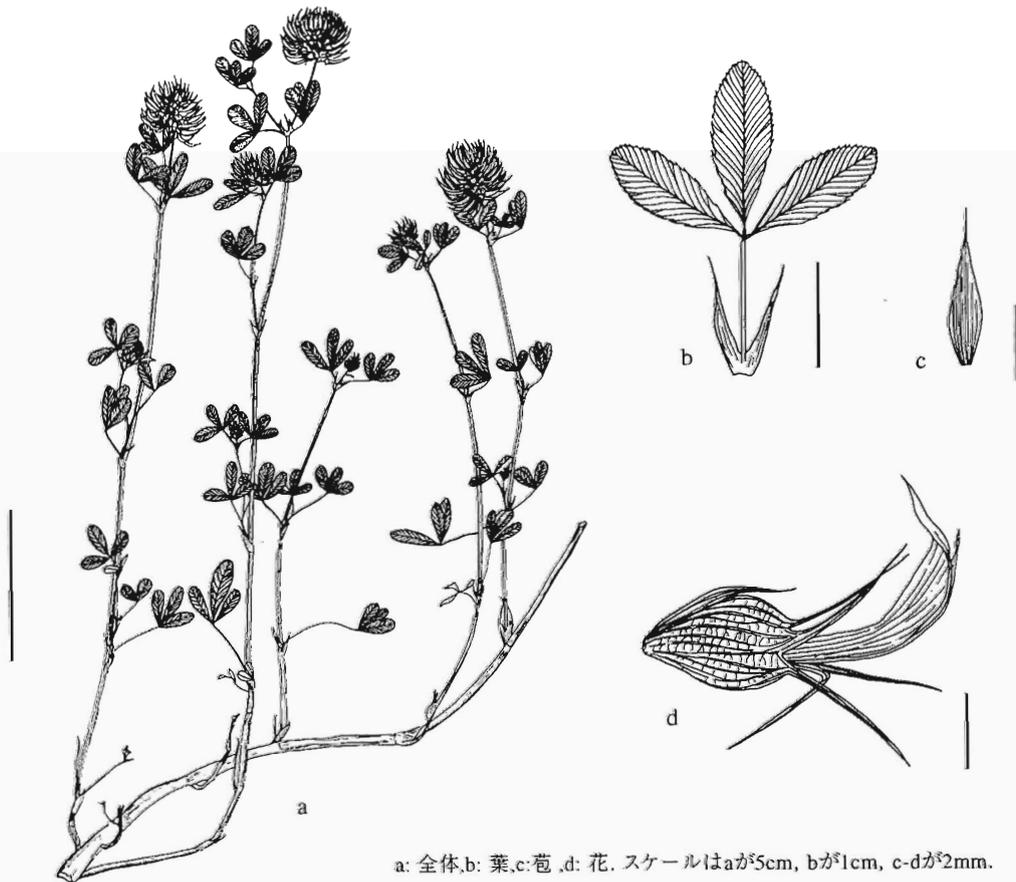
一年草、高さ約30cm、全草無毛。茎は直上から斜上し、枝は分枝する。茎には多くの溝がある。下方の葉は長さ5cmの柄を持ち、上方のものは次第に短くなる。葉は掌状3出葉。小葉は長楕円形、(下方の小葉は長さ3cm幅1cmほど。)長さ15mm、幅6mmで、側脈は緑の細かく鋭い鋸歯に入る。托葉は披針形で、

3分の1ほどが柄につき、先は尾状にのびる。花序は頂生し、有柄、直径約2.5cm、多数の花を球状から卵形につける。小花は柄がなく、小包は膜質、披針形で、萼筒とほぼ同じ長さ、萼は筒部がふくらみ、よく目立つ縦脈とそれを繋ぐ横脈がある。萼裂片は針状で、萼筒よりやや長い。花冠は淡紅色、長さ約1cm。花弁には筋が目立つ。旗弁の先はするどく尖る。豆果に種子は2-3個。

標本 KPM-NA00118634 愛川町半原 中河原 Jul.29.1999 山口勇一。

最後に、情報を寄せてくださった山口勇一氏、また、標本の閲覧に際してお世話になった東京大学総合研究博物館の清水晶子氏に感謝申し上げます。

参考文献: Zohery, M. and Heller, D., 1984. The Genus *Trifolium*. The Israel Academy of Sciences and Humanities, Jerusalem.



## ウマゴヤシ属の絵解き検索

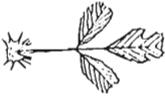
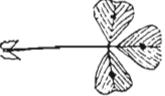
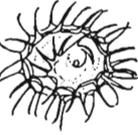
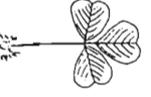
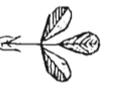
(佐々木あや子)

ウマゴヤシ属 (*Medicago* L.) は、地中海地方、西アジア、アフリカ北部と西部に多く、約50種が知られています。日本に自生するものはなく、全て帰化によるものです。県内には、変種を含めて10種が記録、確認されています。

マメ科の中でも、ウマゴヤシ属は、豆果の形により他の属から容易に区別できますが、種

の同定は、小葉に特徴を持つ種(キレハウマゴヤシ、モンツキウマゴヤシ)があるものの、花、小葉等に大きな差異はなく、豆果の形を確認することが求められます。

県内の記録としては、下記の他に、長田図鑑(1972)に神奈川県産としてトゲミノウマゴヤシ、ウズマキウマゴヤシが載せられていますが、これまでの植物誌調査では標本が採られていないので今回は省略しました。

|                |                       |  |   |   |            |
|----------------|-----------------------|--|---|---|------------|
| 小葉は切れ込む        |                       |   |   | *キレハウマゴヤシ   |            |
| 小葉に著しい斑紋がある    |                       |   |   | *モンツキウマゴヤシ  |            |
| 小葉は切れこまず、斑紋もない | 花は淡紫色<br>小葉の長さは幅の3~6倍 |  |    | ムラサキウマゴヤシ   |            |
|                | 花は黄色<br>小葉の長さは幅の3倍未満  | 托葉の縁は総状に細裂する   |  |  | ウマゴヤシ      |
|                |                       |  |  |  | *コトゲウマゴヤシ  |
|                | 花は黄色<br>小葉の長さは幅の3倍未満  | 托葉の縁はほとんど全縁  |  |  | *トゲナシウマゴヤシ |
|                |                       |  |  |  | コウマゴヤシ     |
|                |                       |  |  |  | コメツブウマゴヤシ  |

\* 神奈川県1988出版後に記録された種.

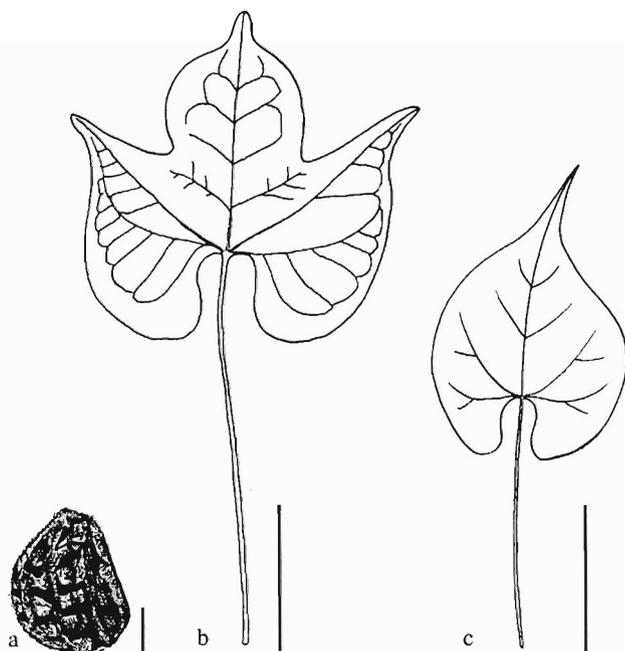
## 国内新帰化種の報告

(秋山幸也)

ツタノハルコウ(新称) *Ipomoea hederifolia* L.

マルバルコウソウと花序などの形態が似ているものの、いくつかの明確な相違が見られる座間市小池東原の標本(松本雅人氏採集)を、昨年からブロック例会で検討してきた。その結果、果柄の湾曲の有無や、種子表面の形状の違いから新帰化種である可能性が高いと判断された。神奈川県立生命の星・地球博物館の勝山氏によれば、熱帯アメリカ原産で世界の熱帯に帰化している *Ipomoea hederifolia* L. が、果柄が直立する、つるの先の方の葉が三裂することで一致することがわかった。

そこで、種小名が“キヅタの葉のような(*hedera* (ウコギ科キヅタの古ラテン名), *folium* (葉))”という意味であるため、ツタノハルコウと新称し、日本新産の帰化植物として報告する。ツタノハルコウの主な特徴およびマ



ツタノハルコウ。a: 種子, b: 三裂する葉, c: 全縁の葉。  
スケールはaが1mm, b-cが8cm。

|    | マルバルコウソウ<br><i>I. coccinea</i> | ツタノハルコウ<br><i>I. hederifolia</i> |
|----|--------------------------------|----------------------------------|
| 葉  | ほぼ全縁                           | 全縁, または茎の先の方の葉は三浅裂               |
| 種子 | 表面は平滑で<br>無毛                   | 表面に凹凸があり,<br>細毛が密生する。            |
| 果柄 | 垂れる                            | 直立する                             |
| 花冠 |                                | マルバルコウソウよりやや小さめ                  |

ルバルコウソウとの相違点は上表の通りである。

*Ipomoea hederifolia* とした根拠については、『Aquatic and Wetland Plants of Southwest United States』(1981)の記載に基づく。*I. coccinea*と併記された検索表がこの文献にしかなかったために拠り所としたが、記載の中で、花冠の長さや萼の長さが今回の標本と一致しないことや、最大の識別点である種子の形状に触れていないなど、まだ問題点が残されている。世界的にもこの両者がはっきりと区別されているか疑問が残るため、引き続き情報収集にあたる必要がある。

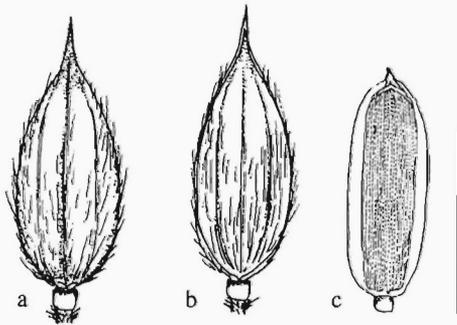
なお、『神奈川県植物分布図集1999』の191ページ最下段中央で、マルバルコウ×マメアサガオ(マルバルコウ×マ...)として分布図の掲載されているものが、本品にあたるものである。

標本: SCM-011116, 011117 (松本雅人, 1998.10.2, 相模原市麻溝台2丁目), 011086, 011325 (松本雅人, 1997.10.18, 座間市小池東原), 010493 (松本雅人, 1998.10.2, 座間市小池東原), 011214 (松本雅人, 1998.11.1, 座間市小池東原)

ホソナルコビエ(新称)

*Eriochloa gracilis* (Fourn.) Hitchc.

座間市小池東原で松本雅人氏が、イネ科ナルコビエ属の一種を



ホソナルコビエ。a: 小穂(第二苞穎側), b: 同(第一小花側), c: 第二小花。スケールは3mm。

採集された。FLORA KANAGAWA No.29において報告されたアメリカノキビ *E. contracta* Hitchc. (勝山, 1990) に一見すると似ているが、葉身は無毛で幅も10mm以上と広い(アメリカノキビは軟毛が密生し、幅5mm~8mm程度)。これらの特徴から、北アメリカ大陸南部とメキシコの高地に分布する *E. gracilis* であることがわかった。そこで、種小名 *gracilis* (か細い、ほっそりした) からホソナルコビエと新

称し、日本新産の帰化植物として報告する。

本種は第一苞穎がほとんど退化している点で、小穂の構造が在来のナルコビエ *E. villosa* と同様であるが、ホソナルコビエの方が小穂はほっそりしていて、長さ4.5mm程度、幅1.8mm程度で鋭尖頭となっている点ですぐに見分けがつく。また、総もナルコビエのように片側一方につかず、両側に10本以上つく。

アメリカノキビおよび本種は、1975年に小笠原諸島父島で帰化が報告されたムラサキノキビ *E. procera* (Retz.) C. E. Hubb. と小穂の形状が酷似する近縁種であるが、花序に軟毛があり、葉身の幅が広い点でムラサキノキビとは異なる。また、ホソナルコビエとアメリカノキビは、葉身の毛や幅のほか、第二小花の先端で見分けられる。ホソナルコビエは尖頭状であるが、アメリカノキビは約1mm程度の芒状の突起が見られる点で異なる。

標本: SCM-NS5013762 (松本雅人, 1999.7.5, 座間市小池東原)

#### 文献

勝山輝男, 1990. 植物誌発刊後に記録された植物 (4). FLORA KANAGAWA No.29 : 294-295.

Hitchcock, A.S., 1951. Manual of the Grasses of the United States. 2nd ed.

### 新帰化植物, ミツノギソウ

(木場英久)

また、松本雅人氏が見なれぬ植物を採集された。

小穂は1小花からなり、護穎の先端に3本の芒があることなどから、イネ科の *Aristida* 属であることはすぐに分かった。芒がねじれないことからマツバシバ、オオマツバシバではない。苞穎が不等長なことや芒が反曲しないことからヒメマツバシバでもない。そうすると、新帰化植物ということになるが、*Aristida* は世界に約250種があり、種を同定するのは難しい作業である。

採集された場所は、大豆粕を撒いた畑で、他にも北米原産の帰化植物が産するところなの

で、原産地を北米と推定し、HitchcockのManual of the Grasses of the United Statesで調べたところ、芒が長さ10~15mmで、ねじれず、苞穎が不等長なことなどから、*Aristida adscensionis* L.と同定された。本種は、世界の暖地で普通に見られる雑草なので、いかにも帰化に成功しそうである。3本の芒が基部までねじれず目立つので、ミツノギソウと新称する。標本は相模原市博と県博に収蔵されている。

本種は、まだ1998年12月13日に横浜市瀬谷区上瀬谷で1回だけ採集されただけなので、県内の他の場所にあるのか、今後、定着するも

のなのか、一時帰化なのかは分からない。北米以外の地域からの帰化の可能性も否定できないので、学名は暫定的に当てたものである。多くの人の目で探していただきたいと思い、調べが不十分な段階ではあると思いつつ紹介することにした。

---

---

### 新帰化植物、シロノヂシャ

(高橋秀男)

綾瀬市史の調査に携わっていた秋山守氏が、1996年5月、厚木飛行場付近(綾瀬市深谷)で純白花のノヂシャの群生地を見出した。ノヂシャは通常花は淡青色であるが、白花の



ミツノギソウ. a: 全体, b: 小穂. スケールはaが5cm, bが3mm.

ものは青色を帯びることはない。花の色のほか、種子の形も大きく異なっていた。単なるノヂシャの白花品種ではなく、別種と思われたので、花の色にちなみ、シロノヂシャと名づけ、形態的な特徴を調べた。

その結果は、標本及びカラー写真、種子の電顕写真を添えて、神奈川県立生命の星・地球博物館で、1997年3月に開催された、日本植物分類学会のポスターセッションで発表した。その後、県央ブロックで採集されたほか、湘南ブロックでは伊勢原市を分担しておられた宮崎直緒子氏が、1998年4月に伊勢原市東富岡で採集された標本を検討することができた。浜口哲一氏によると湘南ブロックでは、ほかに2カ所で採集された標本を同定したという(湘南植物誌V)。

ノヂシャはヨーロッパ原産で、世界の各地に

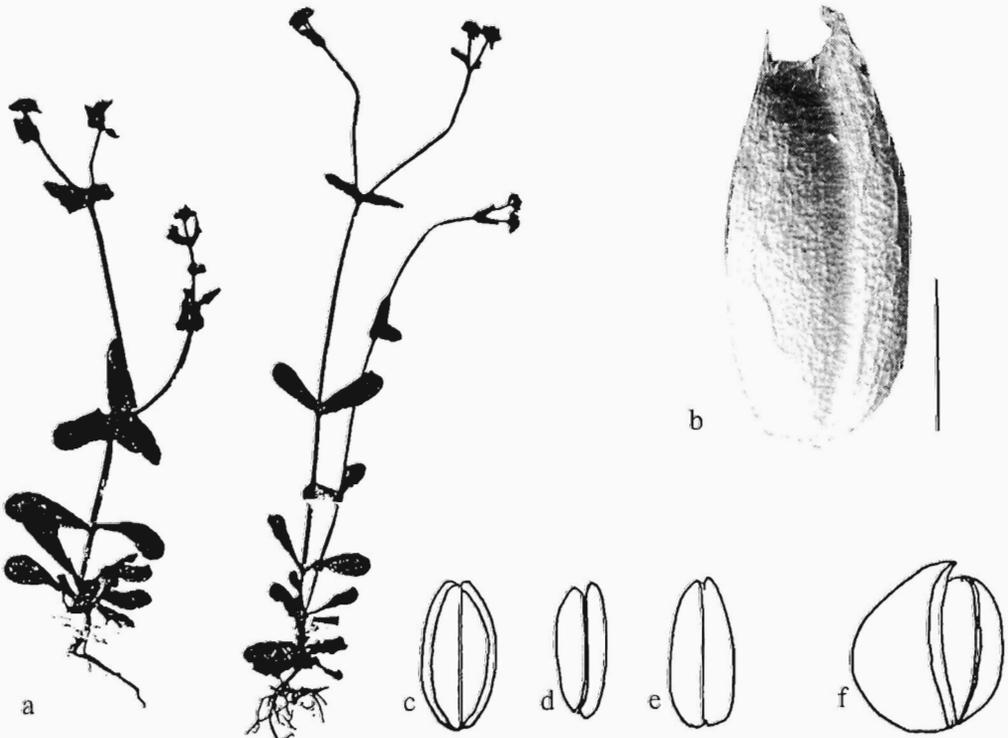
帰化し、普通種となっている。同属のシロノヂシャも帰化種と思われたので、文献に当たってみたところ、北アメリカ原産の *Valerianella stenocarpa* (Engelm.) Krok とよく一致することが分かった。日本での帰化は、神奈川県の記事がはじめてのようである。

葉や茎の様子では、ノヂシャとシロノヂシャの区別は難しいが、花や果実を見れば容易に区別ができる。

○ノヂシャ 花は淡青色。果実は扁平でやや円く、長さ・幅とも2~2.5mm、側面に稜が1本ある。

○シロノヂシャ 花は純白。果実は長楕円形、長さ2mm、幅1mm、腹面は深い溝になる。

(本稿の一部は横浜植物会会報第166号に報告した。)



a-e: シロノヂシャ, f: ノヂシャ. a: 全体, b: 果実の電顕写真(木場英久氏撮影, スケールは500 $\mu$ m), c: 果実の腹面, d: 側面, e: 背面, f: 側面.

# 「湘南植物誌V」を作って

(浜口哲一)

湘南ブロックでは、第二次調査のまとめとして平塚市博物館から『湘南植物誌V』を刊行しました。これはメッシュ別の4段階の産量評価(★●■▲)を分布図としてまとめたもので、種と主要な変種を合わせて、約1900枚の分布図が掲載されています。

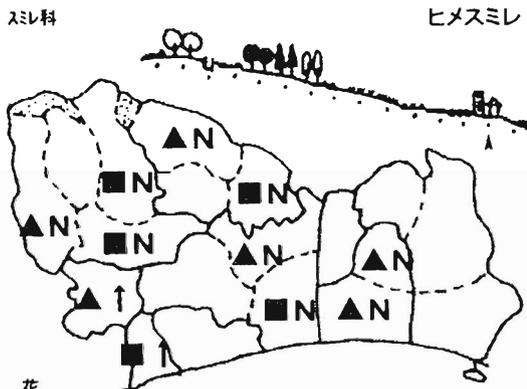
湘南では、第一次調査時にも産量評価の分布図を載せた植物誌を作りましたが、今回はその当時の評価との比較をいくつかの記号で示しました。それは、新たに記録された種(N)、明らかに増加傾向にある種(↑)、減少傾向にある種(↓)、そのメッシュでは絶滅した種(X)、今回の調査では確認できなかった種(?)です。こうした記号を加えた結果、1980年代から1990年代にいたる植物の増減の動向

がある程度浮かび上がってきました。そのおもなものを下記に紹介してみます。

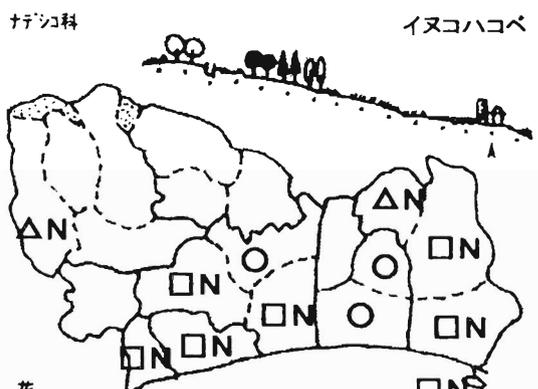
植物の増減を記録するのに10年という間隔は短いのではないかとも思えますが、ウラジロチチコグサやミチタネツケバナの広がり具合などを見ると、人為的な要因が加わっているにしても、植物の広がる早さは我々の想像以上に早いのではないのでしょうか。また、減少傾向については、あまりはつきりしませんでした。これは評価の仕方にもう一工夫が必要だということなのかもしれません。

## 第二次調査で湘南ブロックで新たに記録された種

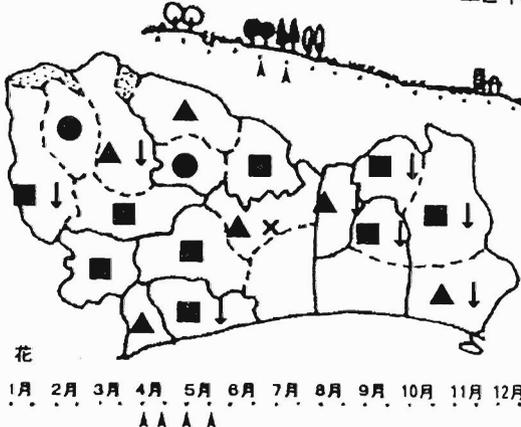
- ・在来種 / マツバラシロ・ミズニラ・コバノイシカグマ・タニイヌワラビ・ミヤマワラビ・キノクニベニシダ・トキワトランオ・タチアマモ・ヒロハトリ



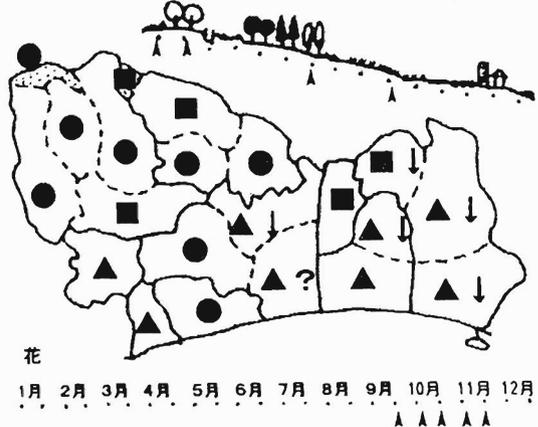
花  
1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月  
A A A A  
ラン科 エビネ



花  
1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月  
A A A A A A A A A A A A A A  
キク科 アキノキリンソウ



花  
1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月  
A A A A



花  
1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月  
A A A A A A A A A A A A A A

ゲモ・アズマガヤ・スズメガヤ・イトハナビテン  
ツキ・ミコシガヤ・コアゼガヤツリ・コウキヤガラ  
・ヒメノヤガラ・タシロラン・ミヤマウズラ・ジガ  
バチソウ・アカメヤナギ・エゾエノキ・コケミズ・  
ヒノキバヤドリギ・コバノボタンヅル・ハルユキ  
ノシタ・カラメドハギ・ヤマハギ・オオバアサガラ  
・サワフタギ・リュウキュウマメガキ・キジョラ  
ン・クマツヅラ・ヒメシロネ・ヒメナミキ・ミヤマナ  
ミキ・ツルアリドウシ・ソバナ

・帰化種／ハイコヌカグサ・ニセシラゲガヤ・  
ハマガヤ・ニセアゼガヤ・タチスズメノヒエ・セ  
トガヤモドキ・シュロガヤツリ・ボタンウキクサ・  
ホウライツユクサ・ルリニワゼキショウ・ニセス  
ナジミチヤナギ・コガネギシギシ・ヒメシロビ  
ユ・ヒメアオゲイトウ・ヌカイトナデシコ・セリバ  
ヒエンソウ・トゲミノキツネノボタン・コタネツケ  
バナ・アコウグンバイ・オハツキガラシ・ホソエ  
ガラシ・ハイキジムシロ・ウマゴヤシ・アメリカ  
アワゴケ・エノキアオイ・オオカナダオトギリ・コ  
エンドロ・マルバハッカ・オランダハッカ・ハコ  
ベホオズキ・ヒメヤエムグラ・シロノジシャ・ヒ  
ナキキョウソウ・クソニンジン・イワヨモギ・タカ  
ヨモギ・ベニニガナ・ウスベニチチコグサ・カミ  
ツレ・エゾヨモギギク・バラモンギク

#### 明らかな増加傾向にある種

・在来種／イワヒメワラビ・ウリカワ・ネジバナ・  
ヒメスミレ  
・帰化種／イヌカタヒバ・ホウライシダ・メリケン  
カルカヤ・ヒメコバンソウ・ムギクサ・シマスズ  
メノヒエ・メリケンガヤツリ・トキワツユクサ・ホ  
テイアオイ・シンテッポウユリ・ニラモドキ・ヒメ  
ツルソバ・ミナトアカザ・ゴウシュウアリタソウ・  
シロバナマンテマ・イヌコハコベ・ナガミヒナゲ  
シ・ミチタネツケバナ・オランダガラシ・ツルマ  
ンネングサ・オカタイトゴメ・アレチヌスビトハ  
ギ・オッタチカタバミ・オオニシキソウ・ウサギ  
アオイ・アカバナユウゲショウ・ツルニチニチソ  
ウ・ホシアサガオ・ワルナスビ・タマサンゴ・マ  
ツバウンラン・アメリカアゼナ・ハナヤエムグ  
ラ・キキョウソウ・アメリカオニアザミ・マメカミ  
ツレ・マルバフジバカマ・タチチチコグサ・ウラ

ジロチチコグサ

#### 明らかな減少傾向にある種

・在来種／オオアカウキクサ・エビネ・カワラナ  
デシコ・アキノキリンソウ

#### \*『湘南植物誌V』購入希望の方は

現金書留または、定額小為替で送料とも  
1410円(頒価1100円)を下記へお送りくださ  
い。

〒254-0041 平塚市浅間町 12-41 平塚  
市博物館 浜口あて

---

---

## 2000年度総会報告

(事務局)

2000年度の総会が2000年4月9日に相模原  
市立博物館大会議室で開催されました。1999  
年度の事業報告、会計報告、会計監査報告  
がなされ、2000年度の運営体制と事業計画、  
予算が審議され可決されました。

その後、湘南ブロック、横浜ブロック、厚木ブ  
ロックから活動状況の報告があり、ミニレク  
チャーとして、秋山幸也氏から相模原市やそ  
の周辺で最近見つかった植物について、  
佐々木あや子氏から、マメ科のシャジクソウ  
属とウマゴヤシ属について、勝山輝男氏から  
イヌホオズキ類について話題提供があり、会  
場の後方のスペースを利用して、3人のレク  
チャーに登場した植物標本の展示が行なわれ  
ました。

#### ●1999年度 事業報告

1999年 4月17日 1999年度総会

(神奈川県立生命の星・地球博物館)

1999年 6月1日 フロラカナガワ48号発行

1999年 7月15日 神奈川県植物分布図集1999発行  
(生命の星・地球博物館総合研究費)

2000年 1月10日 フロラカナガワ49号発行

#### ●1999年度 決算報告・監査報告

|      |      |      |
|------|------|------|
| [会員] | 年度当初 | 261名 |
|      | 新入会  | 11名  |
|      | 退会   | 34名  |
|      | 合計   | 238名 |

横 浜:高橋秀男・堀川美哉・武智憲治  
川 崎:吉田多美枝・吉田三夫  
三 浦:山田友久・青木清勝・大森雄治  
湘 南:守矢淳一・浜口哲一  
厚 木:諏訪哲夫・佐藤恭子・槐 真史  
相模原:秋山幸也  
津久井(小):小崎昭則  
箱 根(小):井上香世子・古川公貴  
その他:城川四郎・勝山輝男・木場英久・  
田中徳久

執筆者 省略

編集委員 城川四郎・大場達之・大森雄治・小崎昭  
則・浜口哲一・山本 明・高橋秀男・勝山輝  
男・木場英久・田中徳久

会計監査 諏訪哲夫・大森雄治

事務局 勝山輝男・木場英久・田中徳久

※ 作業委員は、植物誌改訂のための調査などの  
調整作業を行い、各ブロックの事務局と執筆者で  
構成される。

#### ●2000年度事業計画

【神奈川県植物誌2001】のための補充調査・  
執筆・編集

フロラカナガワの発行(年3回、5月・9月・1月頃を  
予定)

フロラカナガワ総目次の作成

野外研究会・標本同定会(基本的に各ブロックが  
主催し、事務局は連絡を受け持つ)

#### ●2000年度 運営体制

代表 城川四郎

運営委員 秋山 守・大場達之・大森雄治・小崎  
昭則・小原 敬・笠原基知治・北川淑子・  
鈴木一喜・諏訪哲夫・高橋秀男・西山清  
治・長谷川義人・浜口哲一・守矢淳一・村  
上司郎・山本 明・勝山輝男・木場英久・  
田中徳久

作業委員※ ブロック事務局+執筆者  
ブロック事務局

が、その完成を待たずに、お亡くなりになられたことは、誠に残念の極みに思います。

鎌倉の稲村ヶ崎には、初山先生の名がつけられたユキヨモギ *Artemisia momiyamae* Kitam. が生育しています。葬儀の当日、みちくさ会の方が若い葉や前年枝を採集してこられ、お傍に添えられていました。

謹んで先生の冥福をお祈りします。

\* 大井次三郎:日本植物命名者表(1983),及び小林義雄・金井弘夫:生物学者寿命表(1981)によって、日本人の植物学者を長寿の順に記してみました。

|                  |     |
|------------------|-----|
| 伊藤圭介(1803-1901)  | 98才 |
| 佐竹義輔(1902-2000)  | 98才 |
| 久内清孝(1884-1981)  | 97才 |
| 木村有香(1900-1996)  | 96才 |
| 初山泰一(1904-2000)  | 96才 |
| 牧野富太郎(1862-1957) | 95才 |

---

---

## 顧問の初山先生ご逝去

(高橋秀男)

本年3月4日、本会顧問の初山泰一先生が亡くなられました。1904年1月生まれ、享年96才でした。

先生は、財団法人資源科学研究所(1922-1965)へ勤務されたほか、東京大学理学部植物学教室、都立大学牧野標本館、東京大学総合研究資料館で、植物分類学の研究に携わってきました。植物の全てに造詣が深く、さまざまな研究がありますが、なかでもグミ科やバラ科、クスノキ科など、樹木学の分野に多く論文を残されております。また、大学や博物館で植物標本の同定や分類をする一方、みちくさ会や牧野植物同好会などの、ご指導にも当たって来られました。

「神奈川県植物誌1988」の出版に際しては有益なご助言、ご指導を賜る一方、先生からは序文を頂戴し、ご自身にもナデシコ科、モクレン科、バラ科、クスノキ科、バラ科、グミ科、ブドウ科、モクセイ科など、多数の科を分担執筆して頂きました。

先生の業績は、本会刊行の「初山泰一先生論文集-卒寿記念-」(1994)に、全てが収録されています。あらためて、頁をめくってみますと、大変有益な興味深い解説や文献、調査記事が満載です。この機会に会員の皆さんに再読をお薦めします。

いま、「神奈川県植物誌2001」の計画が進み、先生も出版を楽しみにしておられました

---

---

## 編集後記

◎FLORA KANAGAWA50号を記念して、1号~50号の総索引を作成してお配りする予定です。

◎会員同士で連絡を取り合うために名簿を掲載して欲しいとのご意見を会員の方からいただきました。これまで本誌に何度も会員名簿を掲載して参りましたが、このごろの常識で考えますと個人情報管理は慎重にしなければなりません。もしも、電話番号や住所などの掲載をされたくないとお考えの方がいらっしゃいましたら、事務局までご連絡ください。ちなみに本誌は約300部が印刷され、会員の他、全国の植物関係の研究会に配布され、また、図書室で開架されることもあります。問い合わせがあれば、会員でない方には1部500円(会員には300円)で頒布しております。

◎本誌前号でみなさまにお願いした地名データの修正作業についてですが、沢山の情報をお寄せいただきありがとうございます。多くの難題が解決しました。